様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２１４

研究課題名（和文）うつほ物語の基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental study of Utsuho Monogatari

研究代表者
大井田　晴彦（OIDA, Haruhiko）

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：７０３１３１７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：『うつほ物語』は、先行する多くの和歌や物語、漢詩文、史実を吸収することで、日本最初の長篇化を達成した。また、さまざまな階層からなる、個性豊かな人物が多く活躍することも物語の長篇化を促した要因の一つである。本研究は、引用と作中人物の造型という側面から『うつほ物語』について考察し、作品の特性を解明した数本の論文を発表した。また、『うつほ物語』に多大な影響を与えた、『竹取物語』『伊勢物語』などについても研究を進め、物語文学史の展開を考察した。

研究成果の概要（英文）：Utsuho Monogatari is the first feature-length novel in Japan.This novel has prolonged by quotation of waka,monogatari,chinese classics,historical texts. And many characters of various hierarchies play an active part. This research has clarified feature of Utsuho Monogatari by pre-texts and characters. And to research Taketori Monogatari and Ise Monogatari that had great influence on Utsuho Monogatari,I have studied history of fictions of Heian period.

研究分野：日本文学

キーワード：うつほ物語　漢詩文　和歌　作中人物　物語史

１．研究開始当初の背景

『うつほ物語』は、近年すぐれた注釈書の刊行も相次ぎ、著しい研究の進展をみせている作品である。しかしながら、日本最初の長篇物語という重要な作品であるにもかかわらず、この物語を読解・研究してゆく上での事典・ハンドブックの類はほぼ皆無といった状況にあった（なお、2013 年に勉誠出版より『うつほ物語大事典』が出版された）。『源氏物語』を筆頭に、主要な古典作品の多くには、大小さまざまな事典類が備わっており、それらに比較すると異例というしかない。『源氏物語』のほぼ３分の２の分量を持つ、この物語を読み進めるには良き手引きが必要である。重要事項を網羅・整理した『うつほ物語事典（仮）』の刊行によって、研究の基盤整備をはかり、かつ平安朝文学研究の水準を引き上げたいと考える。

２．研究の目的

既に述べたように、『うつほ物語』は、文学史上大きな意義を有する作品でありながら、多くの読者・研究者を得ているとは必ずしも言いがたい。その大きな要因として、この作品の難解さと長大さとが挙げられる。また、この物語の研究が本格的に始められたのは江戸後期からであり、研究の蓄積が少ないことも理由の一つである。物語の全体像を容易に把握でき、さまざまな疑問に即座に答えられるような、至便な手引きが必要である。とりわけ、この作品には多くの和歌があり、個性豊かな多彩な人物が活躍している。また、漢籍・仏典の引用も、作者の該博な知識を反映して膨大である。従来の研究の蓄積を踏まえ、新たな知見を付け加え、物語読解の指針となる事典の作成が急務である。これによって研究の迅速化・効率化が大いに期待できる。『うつほ物語事典（仮）』は、『うつほ物語』のみならず『源氏物語』など他の作品の研究者・読者にとっても裨益するところが大きいと予想される。『うつほ物語』をより多くの人に親しまれる、開かれた作品とすることが、最終的な目標である。

３．研究の方法

将来の『うつほ物語事典（仮）』完成をめざし、重要事項の調査および整理を進める。その概要は、「Ⅰ　各巻の梗概と鑑賞」「Ⅱ うつほ物語の諸本」「Ⅲ　うつほ物語語彙要覧」「Ⅳ　うつほ物語引用一覧」「Ⅴ　作中人物一覧および解説」「Ⅵ　生活・風俗事典」「Ⅶ 作中和歌一覧」「Ⅷ　享受史・研究史」からなる予定であるが、本研究では、このうち「Ⅳ」および「Ⅴ」「Ⅶ」について、先行研究を再検討し、新たな知見も付け加え、整理しなおす。「Ⅳ」では、和歌・漢詩文・仏典・歴史書はもちろんであるが、『竹取物語』や『伊勢物語』といった先行物語、また『蜻蛉日記』などの日記文学からの影響も重視したい。「Ⅴ」では、物語中の全作中人物について、その登場箇所、その行動、呼称や官職などが容易に検索できるようにする。「Ⅶ」では、千首を超える作中和歌について、表現技法や引歌（本歌）、作者や詠歌状況について説明するが、特に類想歌・参考歌についての指摘を充実させたい。和歌を通じて、『源氏物語』への展開も予想される。

こうした作業と並行して、雑誌論文の発表、学会での口頭発表を進めてゆく。『うつほ物語』に限らず、『竹取』『伊勢』『源氏』といった前後の物語についても、物語史全体を視野に収めながら研究を深めてゆく。

４．研究成果

（１）「うつほ物語引用一覧」「うつほ物語作中人物一覧」「うつほ物語和歌総覧」について、先行研究・注釈書の成果を検討し直し、また新たに調査し、データを収集・整理した。疑問のある箇所などをもう少し見直し、小冊子のような形で発表できるよう、準備を進めたい。

これらの作業と併行・関連して、いくつかの論文を公表し、口頭発表も行った。

（２）「〈女はらから〉の文学史」（雑誌論文④および学会発表②）では、男性が〈女はらから〉を垣間見ることから恋物語が始まるという、よく知られた話型を、前期物語から後期物語まで、物語史的な観点から論じた。〈女はらから〉の物語の原点は、『伊勢物語』初段および四十一段であるが、これらの章段では、姉妹に求愛の歌を詠みかけたり、困窮する義理のきょうだいに温かい手をさしのべる主人公の男の姿が中心に描かれている。それに対して女たちにはさしたる記述がない。畢竟、「男」の物語ということができる。続く『うつほ物語』では、実際には叔母と姪の関係にあたるが、あて宮と女一宮が、ともに姉妹のように正頼邸で親しく育ったと語られており、〈女はらから〉の話型を踏襲していると見られる。特にあて宮と女一宮の合奏を仲忠が立ち聞きするという「祭の使」の場面は後にも繰り返し回想され、注目される。特に重要なのは後半部における、藤壺と女一宮の関係の変化である。多くの男達の求婚を振り切って春宮に入内した藤壺だったが、その代償は大きかった。自分を寵愛する春宮のために他の妃たちから妬まれ、宮中で孤立してゆく。あらためて仲忠と結婚して愛らしい姫君までもうけた女一宮に羨望を抱くよう

になってゆく。過酷な後宮に身を置き、熾烈な政争に心身をすり減らす藤壺と、「まめ人」である仲忠との平穏で幸福な生活を送る女一宮の姿が対照的に描かれている。

『伊勢物語』では、もっぱら男の生き方に重点が置かれていたのに対し、『うつほ』に至ってようやく「女の物語」として〈女はらから〉の物語が語られるようになったということである。親しい姉妹の間に次第に溝が広がってゆくという筋立ては、『源氏物語』竹河巻の玉鬘の大君・中君、あるいは宇治の大君・中君、さらには『夜の寝覚』の大君・中君の物語へと継承されてゆく。「男の物語」から女のそれへと、その物語史の転換点として『うつほ物語』が位置づけられるのである。主人公仲忠の人生に深く関わるという点で、藤壺と女一宮の存在感は大きい。

（３）「蔵人少将源仲頼の物語」（雑誌論文②）は、あて宮求婚譚において、独自の存在感をもつ源仲頼について、出家後をも射程におさめて論じた、作中人物論である。仲頼は、管弦に秀でた「世の中の色好み」とされるが、北の方と仲睦まじい、良き夫でもあった。正頼邸の賭弓の還饗で、あて宮を垣間見たことから彼の人生は狂い出す。あて宮を得ようとその音楽の才能を発揮することで、正頼の三条院の「みやび」はいっそうの輝きをますのでもあった。それだけに、あて宮の入内を契機とする、彼の出家が物語に大きな喪失感をもたらさぬわけはなかった。物語が、出家した仲頼と仲忠らの変わらぬ友情のうるわしさを語っていることも見逃すべきではない。とりわけ、春の吹上の浜の逍遥を楽しんだ過往の日々を彼らは懐かしむのであった。あて宮への恋に殉じたその生き方は、新たな生活を歩み始めた他の多くの求婚者たちとは一線を画し、人々に大きな感動を与えるのである。また、仲頼の物語は、没落・崩壊してゆく「家」の物語の一つであり、忠こそや源宰相実忠の物語とも共通する性格が見られることも指摘した。

以前から私は『うつほ物語』の作中人物論を多く発表しており、仲忠・涼・忠こそ・実忠などについては『うつほ物語の世界』（2002、風間書房）所収の論文で取り上げてきた。その後も俊蔭や三奇人などを論じてきた。一連の人物論に、新たに仲頼が付け加えられたことになる。今後の課題としては、藤原兼雅や源仲澄などを取り上げて論じたいと考えている。

（４）「労ある秋の夕暮れ」（雑誌論文①）は、主に表現論的な観点から、「内侍督（初秋）」の巻の特徴を論じたものである。物語中屈指の表現の彫琢をきわめた巻として評価が高く、かつ衒学的なまでに多くの難解な典拠をちりばめた巻として知られる。かつて「『うつほ物語』の転換点」（『うつほ物語の世界』所収）において、求婚譚から琴の一族の物語へと転換をになう重要な巻であると、「内侍督」を位置づけたことがある。そして、俊蔭女・朱雀帝、仲忠・藤壺といった結ばれなかった男女の恋が、かえって琴の一族の繁栄を導いてゆくという、この長篇物語の固有性を明らかにした。

本論文は、こうした論点をさらに鍵語の反復といった、表現の側面から新たに論じ直し、補強させたものである。具体的には、「そらごと」「労あり」「夕暮れ」「風」「蓬・葎」などの、いくつもの要語や動機が繰り返されることで、この巻の主題性がしだいに形成され、明確なかたちをとってくる。また『竹取物語』や、徐市伝承や王昭君説話など多くの漢籍が引用されることで、物語が首巻「俊蔭」へと回帰し、原点に立ち戻ることで新たな物語を紡ぎ出してゆく機微を明らかにした。

（５）あて宮求婚譚の先蹤として、『竹取物語』の求婚譚の存在は大きい。「五人の求婚者たちと難題」（雑誌論文③）、「『竹取物語』を読み解く」（雑誌論文⑥）、「死ぬる命をすくひやはせぬ」（雑誌論文⑦）の諸論考では、五人の貴公子の人物造型、難題、物語の方法などから『竹取』の求婚譚を論じた。特に「死ぬる命をすくひやはせぬ」の論文では、石上の中納言の和歌「かひはかくありけるものをわび果てて死ぬる命をすくひやはせぬ」の「すくひ」について「（命を）救ふ」と「（匙で）掬ふ」の掛詞とする通説に対し、「救ふ」と「巣くふ」の掛詞とし、解釈を刷新した。

（６）「老いらくの恋」（雑誌論文⑤）は、「忠こそ」に登場する一条北の方のような好色な老女の恋というモチーフを、『伊勢物語』六十三段のつくも髪を中心に論じたものである。萬葉の相聞歌、歌謡、あるいは「徒登子好色賦」（『文選』）のような漢籍の表現と発想が何重にも重なり合いながら章段を形成してゆく様相を明らかにした。老女の恋というと古代性・信仰・呪性といった側面が強調されがちであるが、『伊勢物語』にはむしろ、それらへとは距離を置いた批評意識が見られることを指摘した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７　件）

①大井田晴彦、「労ある秋の夕暮れ―『うつほ物語』「内侍督」の表現―」、『名古屋大学文学部　研究論集』、査読有、文学 62、2016、233―244
http://hdl.handle.net/2237/23987

②大井田晴彦、「蔵人少将源仲頼の物語―『うつほ物語』作中人物覚書―」、『国語と国文学』、査読有、第 93 巻 1 号、2016 、21―37

③大井田晴彦、「五人の求婚者たちと難題」、

『知の遺産　竹取物語の新世界』、査読無、2015、55―77

④大井田晴彦、「<女はらから>の物語史」、『名古屋大学文学部　研究論集』、査読有、文学61、2015、165―178
http://hdl.handle.net/2237/21560

⑤大井田晴彦、「老いらくの恋―『伊勢物語』第六十三段とその周辺―」、『名古屋大学文学部　研究論集』、査読有、文学 60、2014、129―141
http://hdl.handle.net/2237/19749

⑥大井田晴彦、「『竹取物語』を読み解く―誕生から、『かぐや姫の物語』まで―」、『美術手帖』、査読無、998 号、2014、74―77

⑦大井田晴彦、「死ぬる命をすくひやはせぬ―『竹取物語』注釈の補訂―」、『むらさき』、査読無、第 50 号、2013、48―51

〔学会発表〕（計　２　件）

①大井田晴彦、「『伊勢物語』六十三段とその周辺―老女懸想譚の諸相―」、名古屋平安文学研究会、2014 年 9 月 28 日、於名古屋大学文学部棟（愛知県名古屋市千種区）

②大井田晴彦、「平安朝前期物語から源氏物語へ―<女はらから>の話型をめぐって―」、名古屋大学国語国文学会平成２６年度春季大会、2014 年 7 月 12 日、於名古屋大学文学部棟（愛知県名古屋市千種区）

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０　件）

○取得状況（計　０　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大井田　晴彦（OIDA,Haruhiko）
名古屋大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：70313179